

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520375

研究課題名（和文）視点概念を軸とした日独語構文の対照的・記述的研究

研究課題名（英文）Contrastive and descriptive studies of Japanese and German sentences centering on the notion perspective

研究代表者

成田 節 (NARITA TAKASHI)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：50180542

研究成果の概要（和文）：視点概念をより正確に規定した上で日独両言語の構文を対照した。その結果、ドイツ語は出来事の外に視座を据えてその出来事を中立的に表現する傾向があるのに対し、日本語は出来事の内側に視座を据えてその出来事を主観的に表現する傾向があることがわかった。日本語の小説とそのドイツ語訳およびドイツ語の小説を主な題材として、動詞の時制、人称代名詞、受動態、恩恵表現などを中心に観察することで、このことを具体的に示した。

研究成果の概要（英文）：The concept of the perspective was defined more exactly and Japanese and German sentences were contrasted in context of this concept. This study could show that the point of view is placed in German outside the event and this event is rather neutrally described, whereas the point of view is placed in Japanese within the event and this event is rather subjectively described. Above all the tense of the verbs, personal pronouns, passive sentences, benefactive expressions were compared in German and Japanese novels and their translations and the above-mentioned differences in the mode of expression were demonstrated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：視点、話者・語り手、人称代名詞、受動態

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代の言語研究には大きく分けて二つの立場がある。一つは生成文法に代表されるように、人間の言語能力の解明という目標のもとで言語理論の構築を目指すものであり、もう一つは、言語使用の実態の観察に基づいて、言語の構造と機能をさまざまなレベルで

記述しようとするものである。

(2) 報告者は後者の立場で、日本語との対照という観点を取り入れながら、主に現代ドイツ語を対象として、動詞の結合価と態、格および前置詞を中心に、構文と意味に関わる諸テーマについて研究してきたが、さらに日本語の考察に一そうの比重を置き、ドイツ語教

育への応用の可能性をも視野に入れながら、ドイツ語と日本語の構文に見られる共通点と相違点を明確にしながらか述することを構想していた。

(3) 日本語学でも「記述文法」が一つの研究パラダイムとして再認識・確立されつつあるが、報告者も、理論的な首尾一貫性を重視し、また言語現象の背後に仮定される原理の解明などを視野に入れながら、言語運用の実態に即した言語現象の正確な記述を最重要課題とするという立場を意識していた。

(4) 報告者が申請時点までに取り組んだテーマに共通する問題意識として、常に「視点」の概念があった。これは構文と動詞の働きという面に焦点を合わせて日本語とドイツ語を（そしておそらく英語などをも）対照的に研究する際に、きわめて重要な概念だと考えられるが、日独対照研究あるいは各言語の態の研究などで用いられる「視点」(Perspektive)の概念は十分に規定されているとは言えない場合が散見された。すなわち、ドイツ語では文を構成する際の顕在的な枠組みとしての構文（ここでは格と前置詞の働きが重要な役割を果たす）と「注視点」(どこに目を向けるかという意味での視点)が深く結びついているのに対して、日本語では「視座」(どの立場から物事を捉えるかという意味での視点)が構文の要としての動詞の働きと密接に連動していると考えられるのであるが、この「注視点」と「視座」のような基本的な区別がなされていない研究が少なくなかった。

2. 研究の目的

(1) 「視座」と「注視点」の区別という観点を中心に先行研究を批判的に検討し、日独両言語の構文論との関連で言及されている「視点」およびPerspektiveの概念を整理し、本研究における道具立てとして規定し直す。その際、英語などとの比較で、日本語表現の特性の一つとしてしばしば言及される「主観性」と「視点」との関連性、また特にドイツ語研究において「視点」との関連でしばしば論じられる「テーマ・レマ文節」との区別も明らかにしておく必要がある。

(2) 実際のデータを観察することを通じて、日独両言語の構文を対照的に記述するための枠組みを作る。具体的には、両言語で内容的に対応しながら、異なった文法形式として現れる表現（たとえば「主語の選択」、「代名詞の用法」、「個体の取り出し」、「態の選択」、「動詞の自他」、「ダイクシス表現」

などの観点が考えられる）を抽出・類型化して記述する。その際、上述(1)の検討作業を通じて規定し直した「視点」概念と関連付けつつ、両言語における表現形式の特性を提示し、可能な限り、それらの差異の根底にある原理の解明も試みる。

(3) 上の(2)で述べたように設定された対照的記述の枠組みに、具体的な表現を当てはめることにより、日独両言語の構文に見られる共通点と差異を文レベルおよびテキストレベルで実質的に示す。ここでは電子コーパスなども利用して、実際に用いられる表現形式の頻度をも可能な限り記述に取り入れることを目指す。

3. 研究の方法

(1) 本研究の土台となる理論的な枠組みの確立を目標に、言語学、ドイツ語学、日本語学、英語学（とくに日英語対照研究および認知言語学関係）の分野で、本研究のテーマに関連する文献を可能な限り広く閲読し、主にドイツ語の構文論との関連で言及されているPerspektive、ならびに日本語の構文論との関連で言及されている「視点」、およびこれに関連する概念（「主観性」など）を整理し直す。

(2) 1970年代半ばから盛んに行われてきた日独語の対照に関する先行研究のなかから、特に「視点」に関わる部分を批判的に考察し、問題点を整理する。

(3) 文献の閲読・概念の整理と並行して、実際のデータ観察を行う。まず、日独両言語の構文を対照的に記述するための実質的な枠組みを作ることを目標に、日独両言語で内容的に対応しながら、異なった文法形式として現れる表現（上述の「2. 研究目的の(2)参照」の抽出・類型化に向けて実質的な作業を進める。具体的には以下の二つの方法がある。一つは、閲読する文献に挙げられている例文を整理すること、もう一つは、日本語とドイツ語の小説から用例を収集し、それぞれのドイツ語訳および日本語訳からも比較のための用例を収集することである。該当する例文の収集・整理などの基礎作業は可能な限り研究補助者に行わせる。

4. 研究成果

(1) 日独両言語の構文を対照する上で「視座と注視点の区別」が重要であることを明確に提示した。この区別は極めて基本的なものであるにも関わらず、ドイツ語研究の分野にお

いて顧みられることはあまりなく、日本語学の分野でも一部を除いては十分に意識されているとは言えない。ドイツ語研究における *Perspektive* の概念と日本語学における視点の概念を比較することでより明確に意識化されるものだと言える。この成果は〔学会発表〕の④に対応する。

(2) 「視座と注視点の区別」を踏まえた上で「視座の位置」に注目すると、ドイツ語と日本語の間には相対的に以下のような違いがあることが確認できた。すなわち、ドイツ語は出来事の外に視座を据えて中立的に表現する傾向があるのに対し、日本語は出来事の内側に視座を据えて主観的に表現する傾向があるということである。この相違は文レベルでも観察されるし、談話のレベルでも観察される。

① 文レベルで観察されるものとしては例えば「ここはどこ?」と“*Wo sind wir hier?*”あるいは「こちらへ歩いてくるでもない、(...)彼は(...)急いで行った」と“*Sie bewegte sich nicht auf ihn zu, (...) Eilig lief er auf sie zu,*” (=彼女は彼の方へ行かなかった (...) 急いで彼は彼女の方へ走って行った) などが挙げられる。これらの例には、日本語の表現では視座が状況の中にあるのに対して、ドイツ語の表現では視座を状況の外に据え、登場人物から離れた位置から客観的に描写しているという相違が反映されている。この成果は〔雑誌論文〕の③および〔学会発表〕の⑧に対応する。

② また、ドイツ語では視座よりも注視点の移動が構文の交替と密接に関連すると考えられるが、これは格の用法に現れることが少なくない。つまりドイツ語では主格の他は対格が注視点と結びつく格であり、その点で与格とは質的に異なる。このことを、コーパスを利用して数量的にも示すことができた。この成果は〔雑誌論文〕①④および〔学会発表〕の⑥に対応する。

③ 談話のレベルではたとえば翻訳を題材にして3人称の小説を観察することで確認できた。すなわち、固有名詞にせよ人称代名詞にせよ、原則として登場人物が明示され、動詞が過去形になるドイツ語では、語り手が出来事を外側から描くような印象を与えるのに対して、登場人物がしばしば非明示で、動詞も過去形と非過去形が頻繁に入れ替わる日本語では、語り手が出来事の内側から、登場人物に寄り添うようにして描くような印象を与えることが多いことがわかった。この成果の一部は〔雑誌論文〕の②および〔学会発表〕の③に対応する。

④ さらに受動態のように文のレベルと談話のレベルにまたがる文法カテゴリーもある。小説や新聞記事などから収集した事例に基づいて日独語の受動態について再考し、受動文の主語の有無および有情・無情の別、動作主表示の有無などの量的な違いも示しながら、以前に提示した「ドイツ語の受動文が注視点に関して能動文と異なるのに対して、日本語の固有の受動文は視座に関して能動文と異なる」という主張を、談話における受動文の用法という観点から補強・精密化した。この成果は雑誌論文の⑤および〔学会発表〕の②⑤に対応する。

(3) より原理的な問題として、文法的人称について考察し、ドイツ語を含む西欧諸語の1・2・3人称への三分割に対して、日本語では自称と他称に2分割されるという(すでに先行研究では指摘されているが、その後は等閑視されている)相違を再確認し、このことが人称という文法カテゴリーの問題であるばかりでなく、「視座の位置」における日本語とドイツ語(および西欧語一般)についての違いと関連することを示した。この成果は〔学会発表〕の①に対応する。

(4) 人称の問題および格と注視点の結びつきとも関連するが、日本語の「ドアを開けてくれた」「ドアを開けてやった」などの受益・授益表現と、対応するドイツ語表現“*Er machte mir die Tür auf.*”(彼は私にドアを開けた)および“*Ich machte ihm die Tür auf.*”(私は彼にドアを開けた)の比較、さらに「電話を掛けてきた」や「田舎から野菜を送ってきた」など、行為の対人的方向性を含む表現と対応するドイツ語表現では、このような「方向性」は明示されないということを確認した。動詞が文中で担う統語的・意味的機能と関連付けてこの相違を考察し、話者が出来事を描く際の視座の違いと関連づけた説明を試みた。この成果は〔学会発表〕の⑦に対応する。

(5) この他にドイツ語と日本語の小説およびそれぞれの日本語訳およびドイツ語訳を読み比べると、視点と関連付けることのできる日独両言語の対照的な特徴がさまざまに浮かび上がる。

① 一見ドイツ語の人称代名詞と対応するような日本語の「代名詞」、特に「彼」「彼女」などは、日本語に固有の語ではなく、現代日本語で用いられる場合でも、むしろ場面指示表現と見なすべきであるという先行研究における指摘は実際の小説などを読み比べても確認できるが、これも状況の外側に視座を

据えて指示対象の照応関係を客観的に表す傾向のあるドイツ語と、状況の内部に視座を据えて、視座を出発点として周りの事物を捉える（すなわち場面指示）傾向の強い日本語という違いと考えることができる。

② 日本語の小説で「～と思う」や「～だろう」などの主観的な表現が用いられている部分のドイツ語訳を見ると、単に「～だ」と訳されているケースが少なくない。このような主観性の表示の有無についても、視座を状況の内側に置くか、外側に置くかという原理から説明できると思われる。もっともこの観察結果については、データ収集が十分ではないので、今後さらに詳しく検討する必要がある。

(6) ドイツ語と日本語の小説とそれぞれの翻訳から用例を収集する際に、対応する部分は同一の内容を表しているということが暗黙の了解とされていることが多いし、報告者も当初はそのように事例収集および分析をしていたが、翻訳理論の文献を閲読した結果、このような暗黙の了解は成り立たないという認識に至った。つまり、翻訳はそれぞれの文化で受け入れられるために、訳者によってオリジナルの表現に「加筆」「省略」「内容の調整」などが施されることも少なくないというのである。基本的にはドイツ語も日本語もそれぞれオリジナルの文章を材料にし、翻訳はあくまでも数ある事例収集のための1つの方法に過ぎないということを今後はいっそう意識する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 成田節, ドイツ語にみる文の成分, 国文学 解釈と観賞, 査読無 (依頼原稿), 2010年7月, 141-147
- ② 成田節, データ「アスペクト」ドイツ語, 東京外国語大学語学研究所論集, 査読有, 第15号, 2010, 231-244
- ③ 成田節, 視点と日独語の表現 — 翻訳の対照を手がかりに, 東京外国語大学論集, 査読有, 第79号, 査読有, 2009, 399-414
- ④ 成田節, ドイツ語の与格と対格 — コーパスを使って数える, コーパスに基づく言語学教育研究報告 (東京外国語大学グローバルCOE), 査読有, 第3巻, 2009, 93-110
- ⑤ 成田節, 受動表現データ・ドイツ語, 東京外国語大学語学研究所論集, 査読有, 第14号, 2009, 141-147

[学会発表] (計8件)

- ① Takashi Narita, Zu satzsemantischen

Funktionen der verbalen Morphologie im Deutschen und im Japanischen, XII. Kongress der Internationalen Vereinigung für Germanistik (第12回国際ゲルマニスト会議), 2010年8月4日, ワルシャワ大学 (ポーランド)

- ② 成田節, ドイツ語と日本語の受動文, 東京外国語大学国際日本研究センター『外国語と日本語との対照言語学的研究』第二回研究会, 2010年7月3日, 東京外国語大学
- ③ Takashi Narita, Zu unterschiedlichen Ausdrucksweisen im Deutschen und Japanischen — anhand von Belegen aus literarischen Texten und deren Übersetzungen —, Internationales Symposium: Literaturwissenschaft und Fremdkulturhermeneutik (招待講演), 2010年6月4日, 淡江大学(台湾)
- ④ Takashi Narita, Zum Begriff „Perspektive“ — eine deutsch-japanisch kontrastive Untersuchung, 日本独文学会第37回語学ゼミナール, 2009年8月27日, ホテルオークス京都四条
- ⑤ Takashi Narita, Kontrastive Grammatik und Grammatikunterricht — am Beispiel der „passiven Sätze“ im Deutschen und im Japanischen, 日本独文学会ドイツ語教授法ゼミナール, 2009年3月20日, IPC 生産性国際交流センター
- ⑥ 成田節, ドイツ語の与格と対格 — コーパスを使って数えてみると何が見えるか —, 日本独文学会秋季研究発表会, 2008年10月12日, 岡山大学
- ⑦ Takashi Narita, Ausdrücke benefaktiver bzw. malefaktiver Bedeutung. Ein deutsch-japanischer Kontrast, アジアゲルマニスト会議, 2008年8月28日, 金沢星稜大学
- ⑧ 成田節, 視点と日独語の表現 — 翻訳の対照を手がかりに, 日本独文学会春季研究発表会, 2008年6月14日, 立教大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

成田 節 (NARITA TAKASHI)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号: 50180542